



# 神様のテスト



mameko1843

## 始まっていない夜。

---

小学生の頃、テストに先生が花丸を書いてくれたら、嬉しかった。

よくできました、って書かれていて、赤丸がたくさんついたテストが誇らしかった。

「テストで百点取ったよ！すごいでしょ！」

そう言って笑える自分が誇らしかった。自分が世界一幸せになった気がして。花丸がついたテストを持ってたらみんなが褒めてくれたし、笑ってくれたし、あたしもいっぱい笑うことができた。

だけど。

だんだん、誇らしく笑う自分がいなくなって。赤丸がついたテストももらえなくなって。花丸ももらえなくなって、みんなが褒めてくれることもなくなって、あたしは世界一幸せだったって思わなくなっていった。普通に笑って、バツのついたテストでも乾いたみたいに笑って、あたしはあの頃の笑い方も、幸せの感じ方も、できなくなっていった。

あの笑顔と幸せって、どこに、置いてきたんだっけ？

その女性は、店の端のほうに座っていた。

彼女は、小さなカウンターの隅で、右手の細い指先に煙草を挟み、左手で時折グラスを手にして口をつけている。彼女のほかに、店内には人が見当たらなかった。平日の深夜1時を回れば、人も少なくなる。彼女は静かな店内で時折携帯を開き、閉じては煙を吸い込み、吐き出している。女をカウンター越しに見ながら、男は女に声をかけた。

「お客様、今日は、お1人ですか？」

「あ、すみません、1人で長居しちゃって。」

「大丈夫です。どのみちお客様が来なくても、朝の4時までは営業しますので。」

「よかった。」

少しだけ会話を交わすと、また店内が静かになる。

グラスを磨きながら、男は女性を見る。見た感じだと、年齢は30代前半から後半といったところか。細身のパンツにカーディガンというシンプルな出で立ちに、肩より少し長いストレートの髪がよく似合っている。女性が入店してきたのは23時ごろだったように思う。まだ客がいる中、彼女はカウンターの端に座り、ジンライムを注文した。それから彼女はゆったりとしたペースで酒を飲み、時折携帯を見、ゆっくり煙草を吸った。

「うちの店に来られるのは、初めてですよ。」

男が話しかけると、女性は男のほうへ視線を向けた。薄暗くてよくは見えなかったが、真正面から見えた顔立ちに、綺麗な人だ、と男は内心感嘆の息をつく。綺麗な女性が店に来ると、矢張り心が躍る。店を開いてよかったと、思う瞬間だ。

「…たくさんのお客様が来られるのに、そんなの、お分かりになるんですか？」

「ええ。一応、来られたお客様の顔は皆様覚えるようにしてるんです、僕。」

「そんなマスターだから、素敵なお店なんですね。」

女が感心したように言って、ふわりと笑う。男は女の前に会った空のグラスをそっと持ち上げる。あ、と女性が言う前に、新しいグラスに氷を入れた。

「ありがとうございます。そう言われると嬉しいな。なにか、作りますよ。」

彼女が注文していたお酒を思い返しなが、男は思いついた酒瓶を手を取った。

男が酒を作り出すと、彼女はカウンターで肘をつき、男を見始めた。見られている、と思うと、僅かながらに手先が震える。

「なに、作ってるんですか？」

「今までご注文いただいた感じだと、さっぱりしたものがお好みかな、と思ったので。」

シェイクしながら男は答える。シェイクしたものをグラスに注ぎ、ソーダを加えてかき混ぜる。女性の前に置くと、彼女は興味深そうにそれを見つめた。

「これ、なんてお酒ですか？」

「エメラルドクーラーです。宝石を味わうような豊かで贅沢なひととき、って意味があるらしいですよ。お客様にとって、今日のこの時間が、そうでありますように。」

男が言うと、女性が嬉しそうに笑った。素直に綺麗だ、と思う。と同時に、興味がわいた。この女性がこんな夜更けに1人でこうしていることに。

「カクテルにも、意味ってあるんですか？」

「意味って言うか、なんででしょうね、由来というか。」

グラスに口をつけ、そうなんです、意味を知って飲んだらお酒ももっと美味しくなりますよね、と言って、女性はまた煙草に火をつける。相変わらず客が来る気配はない。男は女性の灰皿を交換した。ゆっくり彼女を見ると、心なしか、会話を交わす前よりも穏やかな顔つきをしているようだった。

「失礼ですが、どうしてこんな時間にお1人で？」

彼女の反応をうかがいながら尋ねる。薄暗い照明の所為で、彼女の反応ははっきりと見ては取れなかったが、男の質問に、女性は特に嫌悪感を抱いたりはないようだった。グラスを置き、口元で小さく笑う。

「やっぱり、変ですよ。こんな夜中に、おばさんが1人で飲んでたら…。」

「おばさんだなんてそんな。お若いんじゃないですか？」

男としては本心だったのだが、女性は軽く笑って見せた。

「ありがとうございます。実は、通りがかったんですけど、懐かしくなって、寄っちゃったんです。」

「懐かしい？」

男は聞き返した。女性は笑って頷く。

「はい。あたし、実は昔、ここに来たことあるんです。」

グラスを持ち上げて、女性は優しそうに笑う。男は目を見開いていた。店を開店させてから数年、人の顔を覚えることを取り柄として常連客をつけてきた店だから、一度でも来店している女性なら、忘れるはずはないのだが。しかも、それが。

「…お客さんのような綺麗な人だったら、僕、来られたら覚えてると思うんですけど、ね…。」

「そんなに褒めてもらっても何も出なくて、申し訳ないんですけど。…マスターにはお会いしてなかった、かなあ…。」

男をじっと見つめ、女性は考え込むように言った。

「でも、懐かしいお店に寄れて、よかった。」

少しだけ懐かしむような目をして、女性が言う。男はそうですか、と言って目を伏せたが、ずっとこの女性のことを考えていた。だが、どれだけ記憶を遡っても女性の姿が出てこない。女性の勘違いじゃ

ないか、と思ったが、口を噤んだ。女性の目線が、嘘をついているようにも、勘違いとも思えなかったからだ。記憶力はいいほうだと思っていたが、人間間違いもあるし、自分が間違えたのか、と男は自分を納得させた。

しばらくして、女性が口を開いた。

「…大切な人と、昔、ここに来たんです。」

男は無言を守りながら頷く。そういわれてもまったく覚えがなかったからだ。黙ってグラスを磨きながら、それでもしつかり女の話に耳を傾けた。その間にも、記憶を懸命に探してみるが、どうにも思い当たらない。女性の吐く煙が渦になって天井へ昇っていく。それを見ながら、彼女は小さく呟いた。

「もう、だいぶ長いこと、会ってないんですけど。あたし、その人が元気だったらいいなあって思うんです。…どこでどうしてるかとか、何してるとか知らなくても…元気だったらいいな、って。」

最後のほうは男に言うでもなく、宛のない誰かに言うように、女は呟いた。

「…その方とは、もうお会いしてないんですか？」

男の問いに、女は頷く。からん、とグラスの氷が音を立てた。男に話しかけながら、女は思い出す。自分の中に棲んでいた彼を思い出す。

「マスターは独身ですか？」

女が尋ねると、男は恥ずかしながらこの年で独身なんです、と笑って見せた。女からは店内が薄暗くて顔がはっきり見てとれないせいか、はっきりした年齢までは分かりづらかったが、30代後半くらいのように見えた。

「結婚はしたいと思ってるんですが、それがなかなか。」

男が言い、確かに色々難しいですね、と相槌を打って、女は頷いてみせた。ふと店の外に目をやると、いつ降り出したのか、細かい雨がアスファルトを叩いている。待ち行く人々を見ながら、女は小さく息をついた。

「…雨降っていると、いろいろ思い出しちゃうんですね。」

「ああ、そうゆうのありますね。僕も、元カノがすごく好きだった歌聞いたら、色々思い出したり、しますよ。」

男が少し困ったように笑う。女は頷き、そうそう、若い頃ってそういうのが色々あるじゃないですか、といった。あたしにとっての雨も、そんなものです。と付け加える。

「マスターは、出会い系サイトって、ご存知ですか？」

「え？」

突然の単語に驚いたのか、男が聞き返してくる。女はグラスに口をつけてから携帯を開くと、画面を男に差し出した。

「携帯で簡単に登録できて、素性も分からない、相手の顔も見えないのに、メールや電話でやり取りするんです。彼氏や彼女を探してる人がいっぱい登録してて、…顔の見えない、直接喋らない、でも、合コンみたいな感じ？」

そういいながら、女性は携帯画面を男の真正面や突き出す。開かれた画面を男が覗き込むと、其処には運命の出会いはあるかも！というキャッチフレーズと共に、可愛い女性の写真があった。男は、女に頷いてみせる。

「知ってます。今の若い子は結構やってるって聞いたこともあります。聞いた話だと、結婚する子も居るとか。結構危ない橋渡ってるんじゃないのかなあって、僕は思うんですけど。」

確かにそんなリスクもありますね、と女が相槌を打ち、携帯画面を閉じた。そのあとでも、と続ける

。

「……だけど、インターネットだろうと、なんだろうと、心から好きだと思える人と出会って結婚できるなんて、宝くじで特等当てるのと大差ないと思うんですよね、あたし。」

男の言葉に答える代わりに女はそう言って、男は黙って頷いた。

「その大切な人とは、出会い系サイトで知り合ったんです。もう何年も前の話ですけど。」

ほぼ、独り言のように呟いて、女がそっと窓の外を見る。男もつられて店の外へ視線をやった。いつの間にか、真っ暗な空から静かに雨が降り出していた。

「年を取るとなんでも人に話したくなってダメですね。寂しくなっちゃうのかな。」

## 出遭った日。

---

ぽつぽつと降り出した雨が視界を白く染め上げていく。エナメル製の赤いパンプスで来てよかった、とあたしは思った。インディゴのスキニーデニムに赤いパンプス、オフホワイトのドルマンブラウス。特におかしいところはないはず、大丈夫、と心の中で呟く。それから、緊張でどくどく波打つ心臓を感じながら、何度も深呼吸を繰り返していた。

街の片隅で、あたしは朱文を待っていた。朱文は出会い系サイトで知り合った5つ年下の男だった。30歳になってまで出会い系で男と知り合うなんて、と思う反面、出会いなんてドラマみたいにそうそう落ちてくるものでもないんだから仕方ない、こんな出会いもありだし、もし危なそうな人だったらすぐ帰ればいいし、そんな深く考えなくて大丈夫、そんなことを、朱文と会う約束をしてから今日までずっと、自分に言い聞かせていた。

「出会い系って、やってみたら年下も年上も多くてびっくりした。意外にみんな使ってるんだな、って。」

「…うーんまあ、結衣みたいに30くらいになるまで使ったことないって子は珍しいかも。別れたり、フラれたりしたらやってみるって子も結構いるみたいだし。」

朱文と会う少し前、時間が余ったあたしは1人でいる時間が堪らなくなって、友人の奏子に電話していた。奏子は電話の向こうで納得したような声で笑っていた。何を隠そう、奏子の旦那はチャットで知り合って結婚した相手だ。黒縁眼鏡をかけて、いかにも真面目、といった感じの奏子の旦那を思い出すと、あたしはいつも、まったく世の中、どんな人が画面の向こう側にいるかわからないんだな、って妙な感心をする。

「…なんか、例えが変かもしれないけど、スイーツバイキングとかと似てるかも。選び放題？顔が見えないからかな、モテるって勘違いしちゃいそうになる、ね、これ。」

あたしがそういうと、奏子は、確かに男がケーキみたいに取り放題なんて贅沢な世の中になったよね、と言った。ほんとにそうだと思う。顔が見えないとはいえ、男からたくさんの申し込みメッセージが来る出会い系サイトは、現実では全くモテないあたしなんかでも夢見ることが出来る。こんなあたしでも必要とされているんじゃないかって思うことが出来る。

「てゆうか、もうすぐ、その人が来るんじゃないの？私と電話してたら、来ても分からなくなるよ。また会ったら感想教えて。じゃ、頑張ってるね。」

「え…あ、うん。ありがとう、奏子。」

電話が切れる。心細いけど、仕方ない。あたしは携帯をポケットに入れると、黒々とした空を見上げた。奏子と電話が終わっても、朱文を待っている間にも、ぽつぽつと静かに降り続ける雨は、一向に止む気配を見せない。この雨は一昨日からずっと続いていて、その所為か街はずっと薄暗かった。それでも、街を眺めたところで行きかう人の数は大きく変わったりしない。雨くらいで、人の生活が激変するなんて早々にない。毎日同じ時間に起きて、朝食を食べ、仕事へ、もしくは学校へ出かける。そんな繰り返しは、余程のことがない限り、いつも平等に起こってる。会社を辞めて、フリーのwebデザイナーとして働いているあたしにしてみれば、毎日決まった時刻に家を出てたくさんの他人に囲まれて仕事をするって事に対してほとんどリアリティを伴わなくなってしまったけど、街を歩いている大半の人たちからしたらそれが普通なんだろう。フリーランスで、自らがつつが仕事を受注するつもりもなく、以前働いていた会社の繋がりを細々使って仕事を受注するようなあたしは、ここを歩いていく普通、ってカテゴリにははまりづらい。そしてそれは時折、あたしを苦しめたりする。

『ゆいさん、こんにちはー、初めまして。仲良くしてもらえませんか？』

朱文からの最初のメールはそんな文章で始まるメールだった。

でも、あたしの生活はそこで、初めて変わった。たとえばある人が部署を異動するとか、おそらくそんな些細な変化なんだろうけど。

知り合ったとき、朱文は5歳年下だったけど、まだ学生だといった。あたしは彼に仕事を告げるのを少しだけ躊躇った。朱文のことを、25歳だけどまだ学生だと知ってあたしは少しほっとしつつ、それでも社会経験の無い朱文に自分の仕事を告げるのは、なんだか言い出しにくかった。

それでもあたしが朱文に仕事を告げようと思ったのは、ありがちな出だしで始まった朱文のメールのなかに、なんとなくひっかかるものがあったから、で。

「僕は色々なことを経験してみたいから、普通なら知り合えないような人とも知り合いたいなと思ってます。だから出会い系だから付き合わなきゃいけないとかじゃなくて普通にご飯とかいって話してみたいです。ただ流されて生きるのって楽だけど楽しくないから、僕は色々な考えとか、人に巻き込んで巻き込まれたいと思ってて。こーゆうのを普通に話すとかひかれたり聞いてもらえなかったりするから、こんな僕でも仲良くしてくれるって思ったら返事ください。待ってます。」

朱文のメールはそんな風に締めくくられていて、あたしはたくさんの男の人からきたメールのなかから、朱文にだけ返信ボタンを押していた。何を書こうかしばらく考えて、結局シンプルな文面で送った。

「あたしは出会い系をするのも初めてなので、こういう出会いは正直怖いんですけど、普通にご飯とかいける方が見つければいいなって思ったので、仲良くしてください。あたしは特にお話できるような考えとかないかもしれませんが、よろしくお願いします。」

そんな感じであたしと朱文のやり取りは始まった。

まずはお互いのことから。名前や、住んでるところ、好きなもの、嫌いなもの、趣味。そんな他愛のないこと。でもあたしは、朱文に仕事を告げるのはちょっと迷った。それでもあたしは朱文が一番最初に送ってきたメールを思い出して、彼に告げた。

…どんな、反応されるのかな。

これが、時々あたしを苦しめる、ってやつだ。普通とはちょっと違う、ってことを人に知られることが、こうやって時々あたしを苦しめる。文字を打つ指がかすかに震えたけど、あたしは「フリーのwebデザイナーだよ。」とだけ送った。

返事を待つのがどれだけ長かったらう。

ヴヴヴ、とバイブが振動して、あたしが痛いくらい心臓の音を聞きながら携帯の画面を開いたとき、そこにあった言葉は、あたしが予想していたものとは全く違っていた。

「すごいね。ねえ、その話僕もっと聞いてみたい。どうして結衣は、フリーになろうと思ったの？」

あたしは携帯の画面から目が離せなかった。

朱文は、あたしからいくつか仕事の内容を聞いてすごいね、と言い、1人で頑張るなんてなかなかできることじゃないと思う。指示されたことをするのは簡単だけど、そうじゃなくて我が道を行くってかっこいいよ。仕事は必ず土日が休みで月曜から金曜は絶対働かなきゃいけないなんて普通の価値観に縛られてなくて好きだなあ、といった文面のメールを送ってきた。朱文のそのメールだけであたしは彼を気に入って、朱文とメールのやり取りを続けた。フリーのデザイナーなんて自由気ままでいいよね、としか言われたことのないあたしにしてみれば、同年代の友達よりも何よりも、朱文が新鮮で、尚且つ立派な人間に見えた。

25歳でなお学生の彼は、大学を卒業したとき、就職する前にやりたいことが見つかったと話した。そ

のために親を説得し、東京へ出てきたということも。あたしは彼と話をするたびに彼に惹き込まれた。より、朱文のことを知りたいと思い始めた。

「僕、人の話聞くの好きだから。もっと結衣のことも聞かせて。結衣に興味あるよ。」

初めて電話したとき、朱文はあたしにそう言った。初めて話したとは思えないほど、あたしは色々なことを朱文に話した。朱文は電話の向こう側で、笑いながら、時には真剣に、それを聞いていた。朱文に会うことになったのはそのすぐ後で、一度会って話してみたいという彼の申し出を、あたしはすぐに受け入れた。なんの抵抗もなかった。もっと朱文と話してみたいという要求が、あたしの奥底にあった。

「…朱文は、優しいね。」

「僕が？なんで？」

「あたしのことすごいとか、頑張ってるとか、褒めてくれるから。」

「僕はお世辞は言わないよ？結衣がすごいと思うから、そう言うだけ。」

「…ありがとう。」

初めて電話した日から、時折、あたしは朱文とよく話をするようになった。仕事を終わらせてまどろんでいる時、仕事でピリピリしている時、朱文から何かを見透かしたかのようにメールが入ってくる。それは、「元気？」とか「ちょっと話さない？」とか他愛もないメールで、それには全く意味はないのだけど、そうするとあたしはなんだか無性に朱文と話したい、って欲求に駆られるようになった。「話したい。」とか、「うん。」とか、そんな適当で簡素なメールを返すと朱文からはすぐにレスが来て、だんだんメールでは面倒になって、朱文と電話で話す。そんなやりとりが何度もあった。話すのは、特別珍しくもないことで、今日あったこと、仕事のこと、恋愛のこと、自分のこと、様々なことだった。話している時間は十分程度のときもあれば、数時間かかることもある。それだけの時間を使って、あたし達はいろいろなことを話した。

たまに、顔も知らない男にこんなに自分のことを話していいものだろうか、あたしは騙されてるんじゃないだろうか、もしかしたら住所を突き詰められて殺されてしまったり、高額請求をされたりするんじゃないだろうか、と思ったりもした。朱文を待っている今だって、そんな不安がないわけじゃない。でも、朱文と話しているとそんな不安はどこか遠くへ行ってしまうって、あたしは顔も知らない彼からのメールと電話を待つようになった。パソコンで仕事をしながら、それまでは真横に置くことなんてなかった携帯を置くようになった。毎日毎日、それがあたしの習慣になった。

ヴヴヴ、と携帯が振動し、あたしはポケットから携帯を取り出す。朱文だった。ゆっくりと視線をスライドさせてメールを読む。質素なメールで、一言だけ「ごめん。5分くらい遅れるかも。」と書いてあった。

携帯をポケットに入れると、代わりに煙草を取り出して火をつけた。時間潰しにこんなにぴったりのものもない。でもなんとなく朱文の前では吸わないようにしようと思っていたからか、安堵して煙を吸い込めた。肺を満たしていく煙があたしを落ち着かせる。

(…一本、なら吸えるかな。)

降り続く雨の中を、器用に空へ空へあがっていく煙を見つめる。あたしが、雨が降っていても冷静でいられるようになったのは、朱文と知り合ってからだ。

数ヶ月前に別れたあの男。4年付き合っただけで結婚の話も出て、話がいざ進むかというときに別れを告げてきた日にも雨が降っていた。喫茶店で向かい合って座っていたあたし達の外側で雨は静かに降り続いていた。昼間なのに外は暗かったのを、よく、覚えてる。

あの時、裕輔は、店内に入ってあたしと向かい合わせに座ってからも、あたしの顔を一度も見ようとしなかった。顔を伏せたまま、いつもの裕輔みたいな元気よさは微塵も見えない。黙り込んだまま、裕輔はコーヒーを飲み続けて、あたしは灰皿に煙草の吸殻を押し付け続けた。

休日だったけど、昼間だからなのか雨が降っているからなのか店内は人がまばらだった。静かな店内音楽が、あたしたち2人の間にはやけに大きく響いている。だけど、あたし達の横を通り過ぎていくカップルも、親子も、あたしたちみたいな顔はしてない。

「…裕輔。」

灰皿に5本目の煙草を押し付けて、あたしはすっかり氷だけになったアイスコーヒーを飲んでいる声をかける。いつまでもこうしてられるはずなんてない。

「…ねえ、話すこと、あるんじゃないの。」

「…。」

本当はそんなこと、口にしなくてもわかってた。裕輔が何を話すつもりなのかとか、だいたい想像はついてた。でも自分から言い出せなかった。少しでも先延ばしにしたかった。そんなことしたって無駄だって分かってるのに。そんなことしたって時間は止まらないし、気持ちだって戻らない。

「…もう、結衣を、彼女としては見れなくなったんだ、でも友達として、人としては尊敬してるし、好きなんだけど。」

あたしを見て、裕輔が、ゆっくりと、でも一言一言はっきりと、言い始めた。

あたしは何も言わなかった。っていうよりも、なにも言えなかった。裕輔の顔を一度だけ見て、あたしは下を向いた。何も言えなかった。っていうよりも、言えるわけない。なんて言葉を発せればいいんだろ。って、ゆうか、こういうとき、どんな反応をすれば正しいんだろう。みんな、どうしてるんだろう。

何も言葉が見つからないし、どうしていいかもわからなくなって、あたしは黙りこんだ。裕輔はあたしが黙ってしまったからか、言いづらそうに、ゆっくり口を開く。

「…こんなの、俺の勝手だとは思う。でも、別れても俺は友達でいたいんだ。同僚としても、…尊敬してるし。」

そんな三流以下の台詞を吐いて、裕輔はあたしの前で泣いた。あたしは初めて見る男の涙に驚いて、泣かないでよ、とだけ一言言って、席を立った。なにか話したかったけど、それ以上に、裕輔と向かい合ってる自信がなかった。

いま思えば、あの時の裕輔は泣いたし、人としてあたしのことを好きだとは言ったけど、謝りはしなかったし、あたしの顔を見ようとしなかった。そう考えれば結構ひどいんじゃないか、って思えてきて、今となればもっといろいろなことを言ってやればよかったと、思うけど。人間、とっさの状況には案外対応できないもんなんだって、あたしはあの時、初めて痛感した。

煙草を吸いながら街の一角に立って街を眺めていると、色々な人を観察できる。あたしと同じように1人で歩いていく女性、疲れきって肩を落として歩くサラリーマン、道を堂々と占拠して騒ぎながら歩く学生、買い物袋を両手にずっしり提げてゆっくり歩いていく主婦、そのあとを走ってついていく子供。

ふと、その中に、あたしは違和感ある人を見つけた。そのシルエットを見つめたまま、あたしは煙草を地面に落として、パンプスですり潰した。あ、と思ったときにはその人影はあたしのほうを向いて、あたしもその人影をじっと見つめた。

シンプルな黒の七部袖のカットソーに細身のデニム、こげ茶色のマウンテンブーツ。栗色の髪は短くて、ワックスで綺麗に立たせてある。何処にでもいそうな男だったけど、あたしは彼を朱文だ、と直感した。男の視線があたしをじっと見つめてきて、あたしは彼に向かって歩き出していた。歩いている

人達の流れを断ち切るように、真っ直ぐ。同じように、彼もあたしに向かって真っ直ぐ歩いてきていた。流れの真ん中で、あたし達は顔を見合わず。

「…結衣？」

「朱文、だよ。え、と、初めまして。」

お互いの顔が認識できるまで歩いて、あたし達はほぼ同時にそう言った。初めて見る朱文は想像と少し違っていたけど、あたしはそれが朱文だとすぐに分かった。朱文の目がじっとあたしを見てくる。きっとこの人は、人の目を見てまっすぐに話すんだらうな。目の前に立っている男は、そう話す姿をあたしに想像させるくらい、まっすぐにこっちを見ている。

あたしは少しだけ目を逸らして、朱文はあたしをまっすぐ見て。あたし達はお互いに頷きあった。

「うん。結衣って案外ちっちゃいね。もっと、背が高いかと思ってた。」

「朱文は、結構背高いね。それに、男前。」

「そう？僕、友達にはロボットみたいな顔だねって言われるんだけど。」

「ロボット？なにそれ。」

「さあ。僕にもわかんない。」

初めて顔を合わせたのにそんな雰囲気もなく、あたしと朱文は顔を見合わせて笑った。

これが普通なんだろう。ネットで出会った人っていうのは、こんな風に実際に出会って会話して、これが普通なんだろう。頭の中で自分に問いかける。さあ、答えは？まさか、この出会いが初めてのあたしにそんなこと、分かるはずがない。

ぐるぐるする頭をどうにか落ち着かせつつ、横に並んで歩きながら、頭ひとつ分くらいあたしより背の高い朱文を見上げると、朱文が端正な顔立ちをしているのがよくわかる。朱文の友達が、彼をロボットって例えたっていうのも、なんとなく分からないでもない。パーツパーツが整っていて、歪んだパーツが何一つないみたいに見えた。大きめの目にすっと通った鼻と小さすぎない唇と、それがバランスよく顔に配置されている。僕の顔になんかついてる？と朱文に言われるまで、あたしは自分でも無意識に彼の顔を凝視していたことに気づく。

「…あ、ほんとにロボットなのかなって思って。」

「へえ、で、見てみてどうだった？」

「ロボットかどうかはわかんないけど…整ってて綺麗な顔だな、って思うよ。」

ちらりと朱文を見上げて言う。朱文は眉間に皺を寄せながら、そんなに僕の顔ってロボットっぽいかなー、とだけ言って、あたしを見下ろした。でも、綺麗な顔って言われるのは悪い気しないし、ありがとう、と朱文が言い、その下がった目尻と上がった口角に、少し心臓が跳ねた。

「ねえ、結衣、ごはん食べた？」

「まだ。朱文は？」

「僕もまだ。じゃ、なんか食べにいこっか。」

朱文がぽん、とあたしの肩を叩く。出会い系で初めて出会った男女はこういうもんなんだろう。こんな風に普通に他愛もない会話をして、普通に食事に行くような。そんなことを聞いてみたくなかったけど、あたしは歩き出した朱文を追いかけた。「ねえ、出会い系で会った人ってみんなこんな感じなの？」もう少しでそう聞きそうになったけど、自分から出会い系は初めてだから教えてください、みたいなことを聞くのはなんとなく躊躇われて、あたしはぐっと言葉を飲み込んだ。いい年した女が出会いがなさすぎて今更出会い系なんてやってみただけどどうしたらいいか分からないとか、寂しくてやってみただけどこの年でやってるのって恥ずかしいの、とか、やっぱりこうやって普通にごはんとか行くもの

なの？なんて、言えなかった。

「……。」

考えれば考えるほど分からなくなって会話にどうしようかな、と思いかけたところで、朱文が不意にあたしに振り返った。

「ねえ、結衣は何が嫌い？」

「え、あ、生魚系はあんまり…。」

「じゃあ、お寿司以外。よかった、僕そんなにお金持ってないんだ。」

「いいよ、そんなの、お金ならあたし…。」

ふ、と唇に生暖かさを感じて、あたしはぐっと押し黙る。気がつけば朱文の手があたしの口に当てられていて、朱文があたしを覗き込んでいた。躊躇いながら見上げた彼の顔は笑顔で、形のいい唇から小さな息と一緒に言葉が発せられる。

「だめだよ。こういう時はね、男にカッコつけさせなきゃ。知らないの？」

首を上下に振って朱文に肯定の意志を示すと、「いい子。」って笑った顔が間近に見えて、どきりとする。電話の向こうだけじゃない、朱文っていう存在が急にリアルになって、あたしの頭から足の指先まで、すべてが心臓一つになったみたいに、脈打ちだす。

ぽん、ってあたしの頭に置かれた朱文の手から流れ出してくる熱が、熱い。

「…あ、ありがとう。」

かろうじて出た言葉はそれくらい。あたしから離れてまた前を歩き出す彼の背中を追った。電話で話していたり、メールだと、終わってからなんとなく存在がぼやける朱文の姿を見失わないことが新鮮だった。

その間にも、あたしの心臓は早鐘のように鳴って落ち着かない。

「あ、そういえば、ここおいしいよ。」

しばらく歩いてから、通りがかったイタリアンレストランの前で朱文がそう言って、あたしたちはそこで夕食を摂ることに決めた。入り口はあまり目立たなかったけど、ガラス張りのドアを開けると、雰囲気の良いジャズが聞こえてきた。店内は白熱灯の光が程よい明るさを保っていて、心地いい。

「いらっしゃいませ。」

店員に案内されて、あたし達は奥のほうのテーブルにゆっくり座った。

あたし達のほかにいる客はまばらで、ゆっくりとメニューを広げる。そこでようやく、あたしの心臓はゆっくりと通常通りに動き始めた、ようだった。身体全体で脈打っていたような鼓動が、ようやくあたしの小さい胸に収まってくれたらしい。

「今更だけど、イタリアンでよかった？」

「あ…うん、あたし、パスタ好き。」

広げられたメニューには様々な種類のパスタや、ワイン、その他にもずらりと並んでいる。お寿司よりももしかしたらこっちの方が高いんじゃないか、と思ったのは口に出さずに、あたしはトマトパスタを注文した。

「よかった。ここ、生パスタ使ってるから美味しいよ。」

朱文が笑って、僕はカルボナーラにしよ、と言って店員を手招きした。店員が朱文に会釈して笑いかけたのを見ると、朱文はここに頻繁に来ているみたいだった。手馴れた様子で注文を終えると、朱文があたしをまっすぐ見てくる。初めて会ったあの瞬間みたいに、まっすぐ。

あたしはまっすぐ朱文を見れない。少しだけ目を逸らして、隙間からなにかを覗くようにして、かろうじて朱文を見る。さっきみたいに朱文を見上げる形でもなく、目の前に朱文がいる。そう思うと、正

面を見ることができない。

「ねえ、結衣。」

「…なに？」

「結衣って目あわすの苦手なの？会った時もそうだけど、あんまり僕のほう見ないよね。」

「…そ、そうかな。見れてないのは、朱文がカッコいいから…。」

「本当に？」

ウエイトレスが水を運んでくる。失礼します、と言って水をおいたウエイトレスの手を綺麗だなと思って眺めた。朱文の視線があたしをまっすぐ見ていることなんて、目を合わせなくても分かった。それが気まずくて、す、とテーブルから引いていくウエイトレスの手を引き止めたくなくなったくらいだ。

ウエイトレスが去って、静かな沈黙があたしと朱文の間に流れる。

しばらくして、あたしがかろうじて吐き出せた言葉は、空気と音が混ざり合ったみたいな、情けないかすれ声だった。

「…嘘じゃないよ。朱文みたいな、若くてカッコイイ子に見られたら恥ずかしいって。だって、あたしなんか…。」

「僕の顔、さっきはロボットみたいかもって、余裕な感じで見てたのに？」

あたしが話し終わる前に強めに遮られて、あたしは押し黙った。

沈黙があたしと朱文を包んで、あたしは電話で朱文と話している自分を思い出していた。今まで、朱文と電話で話していたときはこんなだったっけ。必死に思い出す。

記憶の中で、あたしは朱文と電話している。携帯を片手にベッドに転がっていたり、時にはテレビを見ていたり、色々な場所であたしは朱文と話している。顔は見えないけど、あたしは電話越しにもまっすぐあたしを見てくる朱文の姿を想像していたように思う。でもその時はこんな風に緊張していたっけ？

あたしは水を一口飲むと、小さく息を吸った。

「…綺麗な、顔だから、緊張してるのはほんと。それに、会ったときも余裕なんかじゃなかったよ。…あたし、こういう風に会うの初めてだし、緊張もしてるし。メールや電話で話すだけなのと、顔を見て話すのは、…違うじゃない？」

かろうじて言う。嘘じゃなかった。顔を見て話せないことがいい印象を与えないことは分かってるけど、それは、本音だった。

気分を悪くしたかな、って思ってあたしはぎゅって手を握り締めて、テーブルの下で膝をそろえた。そんなことをしたところで小さくなれるわけなんかないし、朱文から見えなくなることなんてないのに。

「緊張してるだけ？それなら、よかった。僕、なんか嫌われたのかと思って。」

だけど、朱文はそう言って、笑った。

花開くような笑顔だ、と思った。人懐っこい笑顔。あたしはテーブルの下でぎゅうってブラウスを掴んだ。この感情を、なんて言葉にしたらいいか分からなかった。でも、朱文は水の入ったコップを掴んだままじっとあたしを見ている。あたしは朱文を正面から見返すことは出来ないまま、口を開いた。さっき水を飲んだばっかりのはずなのに、もう口の中が乾いていた。

「嫌うことなんてないよ、…会うまで電話でいっぱい喋ったから、大丈夫。緊張してるの、たぶん、今だけだから。…あたしも、朱文と話したくて、今日、きたし。」

あたしが言うと、うん、と笑った朱文の声が聞こえた。言い終わってから、何うように朱文の顔を見たら、さっきの花開くような笑顔はもう消えていて、すごく真剣な眼差しで、あたしを見ていた。

お待たせしましたー、カルボナーラとなすとモッツァレラチーズのトマトパスタでございます。あたしが言い終わると同時くらいでウエイトレスがやってくる。お皿が目の前に置かれる。美味しそうな香りに彩り、すべてが食欲を刺激するのに、あたしのおなかはいまいち反応が鈍い。

「ん、ま、とにかく食べよ。話すのは後でもいいや。」

「…え。」

「このパスタ、美味しいって言ったじゃん。せっかくご馳走するなら、一番美味しい状態で食べて欲しいし、って僕が作ったわけじゃないけど。」

湯気をたてているパスタをあたしがじっと見ていると、朱文の優しい声が聞こえた。

食べるのに正面向くとき僕の顔見るのが嫌なら、僕の手でも見てる？僕も結衣が慣れるまでは、結衣のほう見ないから。そう言って朱文から差し出された手と、朱文の顔が滲んで見えたのは、きっと出来立てのカルボナーラの湯気のせいだ。きっとそう。あたしはそう自分に言い聞かせて、フォークで茄子を刺した。

## 苦い思い出、甘い酒。

---

フリーのwebデザイナーなんてやっていると、変な話コミュニケーションが極端に減ってしまう。パソコンに向かっていても1人、休憩でごはんを食べている時も1人、仕事が詰まって苦しいときも1人、その逆、仕事を終えて嬉しいはずの瞬間も1人。昼夜が逆転しても、自分ひとりだけだから不自由もしないし、なにか予定を入れるわけでもない。あたしの、そんな生活。数ヶ月前、勤めていたデザイン会社を辞めてからは、知り合いから少しずつ仕事を貰って生計を立てるようになった。少ない給料でも、自分ひとりが生きていくには十分な収入だった。

「笹山さん、退職するんですってね。」

「あ、はい。そうなんです。」

「残念。もっとご飯でも一緒に行けばよかったわね。」

「…すみません。」

「笹山さんのセンス、私は好きよ。仕事も速いし。だから、辞めちゃうのはほんとに残念。」

あたしが会社を退職する数日前、そう話しかけてきたのは青柳先輩だった。

あの年でようやく結婚が決まったらしいけど、どうやら彼氏の収入が少なくて暮らしていけないから共働きするんだって、だからしばらく子供は作らないとかって噂だよ----。

青柳先輩の、そんな話が女子社員の間を広まっていたばかりの頃だったから、あたしは青柳先輩と会わないように極力努力していた。それなのに、トイレの個室から出たとたんに話しかけられて、あたしは戸惑った。なんでこう、よりによって。

狭い女子トイレのなかはあたしと青柳先輩だけで、あたしは早く此処を出て行きたかった。それなのに、青柳先輩がリップを塗りながら鏡越しにあたしを見つめていて、あたしはその目から逃げる事が出来なくなっていた。鏡越しですら、先輩を直視することが出来なくて、俯く。

「あ、でも、あたしより仕事出来る方なんて、たくさんいらっしゃいますし。あたしくらいが抜けたってどうってこと…。」

「そうね、あなたが抜けたところで仕事には何の支障もないと思う。まあでも、あなたはフリーでもやっていけるんじゃない。このご時勢だからそうそううまくはいかないだろうけど。…今日は別にそんなことをいおうと思ってたわけじゃないの。」

不意に、青柳先輩の口調がきつくなり、あたしは黙り込む。分かっていた。青柳先輩が言いたいことは、あたしの退職なんかじゃないって事は痛いほど分かっていた。でも、そうしてくれたらどんなにか良かったか。仕事のことで罵られたり怒られる方がよっぽどマシだった。

「…もう、谷くんには関わらないで欲しいの。」

先輩の目線が、鏡越しにあたしから外されなくて痛い。あたしは何も言えなかった。煙草を吸いたい、と思ったけど、喫煙所があるのは屋上だけだし、休憩時間が終わるまでに先輩から逃れられそうになかった。どうしてこういうときに限って誰もトイレに入ってこないんだろう。タイミングの神様も、先輩には近寄ってこないんだろうか。

先輩があたしの言葉を待っている。

「…谷とは、もう別れましたし、関わるなんて…。それに、あたし、フラれたんで…。」

先輩からの目線を逸らしたままかろうじて絞り出した声は、やっと声になった、って感じだった。だけど、ちゃんと青柳先輩には届いたらしい。少しだけ覗いた鏡には、目尻がちょっと下がった先輩の顔が映っていた。少しだけ皺の目立つ口角が上がっている。それを見て、あたしは少し前に別れた裕輔

の顔を思い出した。思い出せば記憶なんてすぐ、鮮明に蘇る。

あの頃あたし達はまだ付き合っていて、世間は、バレンタインだった。街中をカップルがたくさん歩いている。その時のあたしと裕輔もきっと、傍目から見れば、歩いているカップルとなんら変わりはないんじゃないだろう、と思う。

でも、回りのカップルは笑顔で歩いている人たちが多く、あたしだけは不機嫌だった。裕輔のカバンの中からちらちら見える安物の包み紙に混ざって見える、高級そうな包み紙によって。あたしは裕輔がそれを誰に貰ったかも大体見当がついていて、だからこそ、機嫌が悪かった。

「…義理チョコ、高いのも安いのもいっぱいもらえたみたいで、よかったね。」

あたしが言うと、裕輔は困ったみたいに笑った。あたしの目線がカバンの中の包み紙に注がれているのを観念したみたいで、それを取り出す。あたしの顔を何度か見てから、裕輔が言いにくそうに口を開いた。

「これさ…青柳先輩が、…バレンタインにつけてくれたんだ。」

包み紙を取り出して裕輔が言う。あたしは渡されるままにそれを受け取ると、包み紙に書いてあるメーカーに驚いた。あたしも見たことはあるけど、義理チョコで買うようなものじゃない、んじゃないだろうか。

「え、なにこれ、…ゴディバ？」

「ああ、俺はチョコ詳しくないけど、周りのやつがそー言ってた。高いんだろ？これ。」

あたしが言うと、裕輔が困ったように笑う。あたしは強く頷いた。ゴディバなんて、あたしの常識で考えたら義理チョコで買おう、だなんて、とてもじゃないけど思えない。だけど、世の中にはもしかしたら、そんな高いチョコレートでもたくさん買って配る人がいるかもしれない。

だから、あたしの機嫌の悪さがどんどん進んでいくのは、そこじゃない。チョコレートがゴディバだろうが、スーパーで売ってる12粒98円のチョコレートだろうが、そんなこと全然関係ない。関係ない、とは言い切れないかもしれないけど、あたしにとっては、裕輔にゴディバを送ったのが先輩だって言うことと、それと、もっと大事なこと。で。

「…義理チョコにしては高すぎる気がするけど。先輩は、まわりにもみんなこれ、配ってたの？」

「いや、俺だけ…。他のみんなも、お前だけなんでだよ、おかしい、って言ってた。」

あたしの顔つきが厳しくなったんだろう、裕輔が言い淀んだ。

これだった。あたしの機嫌の悪いのはこれが原因で、裕輔もそれは分かっている。だから、裕輔の手は、チョコレートを触るのもおそるおそる、って感じだった。

「……うん、おかしいと思う。あたしも。」

そういいながら、あたしは自分のカバンからチョコレートを取り出せなかった。バレンタインだからって、仕事が終わってから、寝不足になりながら作ったチョコレートだった。形もいびつで、たぶん、味も普通の。そんな綺麗なラッピングもできていない。いかにも高くて美味しそうで綺麗な包み紙のチョコレートの前に、あたしのチョコレートなんて、出したくなかった。あたしは黙って、俯く。

しばらく沈黙して、裕輔の声がした。

「…大丈夫だって、結衣。」

「大丈夫って、…なに、なんの慰め？」

「慰めとかじゃ、なくてさ。」

俯いたあたしの頭を撫でて、裕輔が笑う。

「俺、高いチョコより、結衣が作ってくれたチョコのほうがいいし。」

あたしのカバンを覗き込んで、裕輔が言う。あたしはカバンを押さえてみたけど、遅かった。裕輔が

、あたしの見覚えのある袋をカバンから抜き取って、笑う。

「青柳先輩も、別に俺のこと好きとかじゃないって。後輩として可愛がってくれてんだろ、あんまり気にすんなよ。」

「…でも…」

裕輔が袋を開けて、うまそー、って笑ってるのを見て、あたしは言葉を濁した。裕輔はあたしの頭をぐしゃぐしゃって撫でてから、笑った。

「先輩は確かにちょっと困るところあるけど、でも俺は結衣が好きだし、大丈夫だって。な。」

「…うん。」

せっかく作ってくれたんだし、可愛い顔が台無しだろ、って裕輔が笑う。あたしの作ったいびつな生チョコを指に挟んで笑ってくれてる裕輔に、あの時のあたしはなんの疑いも持たなかった。

なのに。

別れたあの日、裕輔は、あたしにごめん、の一言もくれなかった。

そしていま、あたしの隣に裕輔は居なくて、裕輔の隣には、先輩がいる。

あの頃、青柳先輩のことは困ってるって言ったのは裕輔なのに、あたしと別れて先輩と、だなんて。最初聞いたときは耳を疑った。あたしのことは彼女として見れなくなって友達としか見れないっていった男が、困ってるなんて言ってた女と、あたしと別れてすぐ結婚することになるなんて。

あたしにとってそれは、頭を殴られた以上の衝撃だった。

ほんとうは、この2人の結婚には何か理由があるんじゃないか、裕輔は何か弱みを握られて脅されたんじゃないか、どうしてあたしと別れてこの人なのか、なにか特別な理由があるんじゃないか、とか、色々考えた。そうじゃなきゃ、裕輔を幸せに出来るのがあの人なわけないって。どうしてあたしじゃなくてあの人なんだろうって。

だけど、裕輔はその理由を何ひとつ、教えてくれなかった。

あたしがじっと黙っていると、青柳先輩の、安堵のようなため息が聞こえた。

「それならいいの、それだけ言いたかっただけだし。笹山さんも幸せになれるといいわね。」

あたしが何も言わずにいると、そういつて、青柳先輩が鏡から離れていく。ドアが開いたとき、裕輔のつけていた香水がふわっと香った。トイレのドアがパタン、と閉まった直後、あたしは肩の力が抜けたみたいにトイレのドアに寄りかかって、それから誰にも知られないように少しだけ泣いた。

それがあたしの、あの会社での最後だった。

フリーに転身してからは、収入は減ったけど、元々そんなにアクティブではないあたしからしてみれば、自分のペースで仕事ができ、しょっちゅう開かれる飲み会に連れまわされることもない生活はほっとした。自分のペースを守れることは、会社にいるよりもあたしを安堵させた。

それに何よりも、裕輔と青柳先輩の姿を見ないですむことが、一番ほっとした。

でも、雨が降るたびにあたしは独りでいることが耐えられなくなった。裕輔と別れた日降っていた雨のことが、どうやっても頭から離すことができなくなった。雨が降るとぼんやりと頭の中に浮かび上がってくる裕輔の泣き顔と、それから後ろに立っている青柳先輩の姿が、どうしようもなく苦しかった。

雨が降ると仕事が出来なくなる。でも、フリーで仕事を請け負う以上、そんなことじゃ信用してもらえない、納期を守れないデザイナーなんてすぐ仕事なくなる、そんなことは痛いほど分かっていた。

「仕事…仕事だって、あたし！」

何度、そうやって自分に怒鳴ったか分からない。何度言い聞かせたか分からない。真っ白な画面のまま進まないパソコンのディスプレイを見つめながら、じっと降り続く雨の音を聞きながら、あたしは泣

き叫びたくなるのを何度も堪えた。

なんで、あたしがこんな気持ちにならなきゃいけないんだろう、どうして、どうしてあたしだけが。裕輔は幸せになって青柳先輩も幸せになれて、どうして、あたしだけが。どうしてあたしはこんなところで1人で泣かなきゃいけないんだろう。謝罪の一言さえくれない裕輔が、あたしに対してあんな言葉を吐きかける先輩がどうして幸せになれて、どうしてあたしだけがこんなところに1人で留まって一人で泣いてこんなことになってるんだろう。

考えれば考えるほど、気が狂いそうになった。別れた時、散々奏子や数少ない友人達に話を聞いてもらって、あたしは前に進んだと思っていた。でも雨が降るとあたしの足元はぬかるんで止まってしまう。止まっているうちにどんどん後ろに引き戻されてしまう。そして、あたしはまた同じ場所にうずくまって動けなくなる。裕輔と青柳先輩が並んで立っている、その場所に。

そんな日が続いたある日、あたしは、パソコン画面に文字を見た。

『新しい出会いを貴方に。素敵な出会いが貴方を待っている！』

特になんでもない、出会い系の広告だった。こんな仕事をしていれば、こんな広告はほぼ毎日、うんざりするくらい目にする。でも、その時はそこから目を外せなかった。あたしはディスプレイに表示された文字を見つめたまま動けなくなって、気がつけば決定ボタンを軽く押していた。乾いた音だった。

サイトの情報によれば、あたしが登録したサイトは出会い系サイトのなかでは老舗らしくて、安全・安心・素敵な出会い！がキャッチフレーズみたいだった。

散々名前でも悩んで、結局『結衣』で登録した。そのあと、画面にしたがって色々な項目を登録したら、あとは自分から何もしなくても洪水のようにメールが入ってきた。パソコンから携帯へメールが来るように転送設定をかけてからは、閑古鳥の鳴きかかっていた携帯が一変して、しょっちゅう鳴り響くようになって、あたしは携帯の対応に忙しくなった。読むだけでも膨大なメールを眺めながら、年代も容姿も趣味もばらばらで、ばらばらな人たちがあたしに興味を持ってメールを送ってきてる、ことにちょっとびっくりした。いったいこの人たちは、あたしに何を思ってメールしてきてるんだろう、メールを受信し続けて忙しく動き続ける携帯を見ながら、あたしは何度も画面の向こう側にいる男の人たちを想像した。

「初めまして。仲良くしてもらえませんか？年は離れてるかもしれないけど、大事にするし、お金のほうも少しくらいは工面できます。」「真剣に結婚相手を探してます。あんまり恋愛経験はないけどそのぶん大事にするんで良かったら連絡もらえませんか。」「彼女募集中一。気軽にメールしてね！」「はじめまして！気軽に友達からどうですか？」

多少言葉は違えど送られてくるメールはそんな文面が多くて、出会い系なんて右も左も分からないあたしは、最初こそ律儀にメールを返していた。でもそれもだんだん面倒になって、同じような文面のメールには返事を返さないようになっていた。だんだん画面の向こうにいる人を想像するのも疲れて、出会い系も辞めようかな、と思った頃、あたしは朱文からメールを貰った。

『こんにちは、初めまして。仲良くしてもらえませんか？僕は色々なことを経験してみたいから、普通なら知り合えないような人とも知り合いたいなと思ってます。だから出会い系だから付き合わなきゃいけないとかじゃなくて普通にご飯とかいって話してみたいです。ただ流されて生きるのって楽だけど楽しくないから、僕は色々な考えとか、人に巻き込んで巻き込まれたいと思ってて。こーゆうのを普通に話すとかひかれたり聞いてもらえなかったりするから、こんな僕でも仲良くしてくれるって思ったら返事ください。待ってます。』

他のメールからひとつだけ浮かび上がったみたいなそれを、あたしはしばらく眺めていた。それから朱文と頻繁にメールをするようになって電話をするようになって---、パソコンで仕事をしながら、それ

までは真横に置くことなんてなかった携帯を置くようになった。晴れの日も、雨の日も。

「寂しいときは、甘えてもいいと思うんだ、俺は。」

あたし達は場所を変えて、薄暗いカラオケルームにいた。朱文の視線を真正面から受け止められているのは、テーブルに置かれたアルコールの所為だと思う。ぶれているコップの輪郭を横目に、ぼんやりする朱文の視線をじっと見ていた。すこし滲んでいてもやっぱり朱文の顔は綺麗で、思わずあたしは朱文の頬に手を伸ばしていた。

「寂しい？」

朱文の形のいい唇が動いて、あたしを見ている。あたしはゆっくりと、何回か首を縦に振った。

「…ん、うん、寂しい…」

朱文が静かに笑った気がする。

鼻先にアルコールの匂いがして、あたしは今、自分の置かれている状況をぼんやり考えた。

イタリアンレストランを出て、あたしたちは何となく街をふらついた。そのまま帰っても良かったはずなのに、あたしたちは駅からどんどん離れて行って、30分くらい歩いた。特に何か話すこともなく、あたしたちは賑やかな街の中を歩き続けた。朱文の顔を少しだけ見上げたり、街を眺めたり、あたしたちはただ、歩いた。

「結衣。大丈夫？」

「あ、う、うん、大丈夫。て、ゆうか、ごめん、恥ずかしくて…あんまり、顔、覗かないで。」

「えー。さっきはすぐ慣れるって言ったのに、全然慣れてくれないね。どうしたら話してくれる？」

あたしの顔を覗き込んで、朱文は不満そうに言った。確かその通りで、自分で話したいって言ったわりに、電話ほど話せてもいなかった。なんだか気まずくなって、あたしは隣を歩く朱文の顔を見上げる、

「じゃ、じゃあ…お酒、お酒はいったら話せるかも…。お酒、飲まない？」

こういうのをきっと苦し紛れ、っていうんだろう、あたしは咄嗟にそんなことを言っていた。あ、しまった、って思ったときはもう遅くて、朱文は間髪いれずに大丈夫、いいよ、って即答した。やっぱりやめ、なんて、朱文の楽しそうな顔を見たら言えなくて、あたしは小さく笑って頷いた。

「よかった。これで結衣ともっと話できるね。」

「…あ、う、うん。よかった。」

内心はそれでもどうしようどうしよう、って頭の中がぐるぐるしたまんまで、でも、ちょっと横を見上げて綺麗な顔が楽しそうに笑っているのを見たら、なにも言えなくなった。

あたしたちは、道路の端の方、人目を避けているみたいに静かに佇んでいたお店にはいった。紫色の小さな看板と、小さな黒板に英語で書かれたメニューがお洒落な、小さなお店。まだ若そうなマスターが柔らかい物腰でいらっしやいませ、って言って、あたしは朱文の後ろをついたまま黙って頷いた。そこまでは、まだアルコールも入ってなくてよかった。記憶もしっかりしてたし、話だって、まだ大丈夫だ、と自分では思っていた。

「美味しい、ね、これ。」

「そ？よかった。」

でも、だんだん、頭がぼんやりして、霞がかってきて。甘いからって勧められるがままに飲んだカクテルの所為だ。きっと。

「あたし、元彼にフラれたの。結婚の約束もしてたのに。」

「一言も謝ってこないなんて、あたし、そんな価値しかない、女だったのかな…。」

「1人でいたら寂しくて、気が狂いそうになるときがあってね…。」

話していたのは確かそんな感じのことだった気がする。朱文は、カウンターの下で、バーのマスターからは見えないようにしてあたしと手を繋いでくれていて、あたしの話に、静かにうん、うん、って何度か相槌を打ってくれていた、と思う。

完全にあたしのアルコールが回った頃、朱文が休憩でどっかいこっか？って言って。ぼんやりする頭のままあたしは頷いて、あたしたちは派手な電光掲示板が光るカラオケボックスへ移動した。耳を突く騒音も、店員のいらっしゃいませー、と叫ぶ声も少し遠くて、受付を済ます朱文の声だけが妙に鮮明だった。

部屋に入ってから、あたしたちは歌うこともなく、ただお酒を注文して、それを淡々と飲み続けた。時々、ぽつりぽつりと会話をした。何を話したかなんて自分でも定かではないけど、時々朱文の顔を見たら朱文が笑っていて、あたしはいつの間にか自然に彼の顔を見ていた。電話していたときいつも感じていたみたいな朱文の真っ直ぐな視線を、ちゃんと受け止めていた。

「ねえ結衣、手、出して。」

「手？」

不意に朱文が手を差し出してきて、あたしもつられて手を差し出した。あたしよりも一回りくらい大きい朱文の手が、あたしの手の上に置かれる。

「ね、俺の手握ってみてよ。」

言われるまま、あたしは朱文の手を握る。朱文はしばらくあたしの手と自分の手を眺めてから、あたしの手をそのまま引き寄せた。朱文の目があたしの目の前にあって、お互いの呼吸が聞こえるほど近い。朱文と繋がった手が熱い。そのままあたしと朱文の顔の間に手を挙げられて、身体の熱がぐんっと上昇したみたいだった。

「あ、結衣は甘えただ。…あのね、こんな風に手を繋ぎたがるのは、甘えたなんだった。」

朱文の、呟きみたいな言葉にあたしは答えなかった。朱文と自分の繋がれた手を見たまま、朱文の指一本一本と絡まっている自分の指を見ていた。朱文の顔が、あたし達の手をはさんで向かい側にある。あたしはただ、首を上下に軽く振った。どんな風に、今、自分が抱えている気持ちを伝えたらいいか、分からなかった。

「寂しいときは甘えたらいいんだよ。俺でもなんでも、使えばいい。」

…そういえば、朱文が俺って言い出したのはいつからだった。

そんなことを考えながら、あたしはだんだん近づいてくる朱文の顔を見つめていた。まっすぐあたしを見つめてくる目は優しい。すこし滲んだ輪郭も大きな目も、優しい声も温かい手も優しい。指を絡めた手が膝上に置かれて、もう片方の手が肩に置かれる。

「…寂しいときは、俺と一緒にいてあげる。」

朱文の声が耳元でそう聞こえて、あたしは朱文の顔を見ようとして、でもそれは適わなかった。

朱文に何か言おうとして、あたしは口を開くのを諦めた。朱文と繋がったままの手から、だんだん熱が溜まっていくからだとは裏腹に、妙に冷えた頭の片隅で、延々と流れ続けるカラオケボックスの映像の音を聞きながら、音が大きくてよかったな、カクテルで回った頭がぼんやりしててよかった。背景が滲んで、朱文の言葉全部が頭の上を歩いていくみたいでよかったな、なんてそんなことを思った。

安っぽい合皮のソファに身体を押し付けられて、体中が熱くて呼吸し辛くて、あたしは何度も小さく息を吸い込んだ。もし、溺れて海の底に沈んだとしたらこんな感覚なのかな、もしそうだとしたら、も

うなんだか、本当にこのまま沈んでどうかなればいいのに。目を閉じて、もうそのままどうかなればいいのに。今、朱文と触れ合ってる体温だけ感じてられればもうそれでいいのに。朱文が今だけでも一緒にいてくれるって言うなら、もう、それで。この今だけで。

でも、あたしはそんなのは夢だって、有り得ないって分かっている。目からつ、って伝ったのを朱文から見えないように拭って、あたしはぎゅって目を閉じた。

消えない体温。

---

「それって、まさに、出会い系の真髓というか、遊ばれたよね。」

「…うーん。」

氷が解けて薄まったコーヒーを無理矢理胃の中に流し込んで、あたしは奏子の前に突っ伏した。昼過ぎの喫茶店は程よく込んでいる。あたしたちは入り口から一番遠い店の奥で、向かい合って座っていた。久しぶりに会う奏子はすこし痩せていた。濃く引かれていたアイラインが薄くなり、アイシャドウの色が変わっている。

「奏子とこーやって会えるのっていつぶり？だいぶ久しぶりだよな？それなのにごめんね、急で。」

「前あったのは翔が幼稚園入る前だから、もう一年位かな。大丈夫、結衣が呼び出しかけてくるなんて珍しいから。」

奏子が言いながら、アイステイーを飲んでいる。ストローを上っていく液体が透明で、綺麗だと思った。

朱文と会ってから3日が過ぎていた。

3日目の朝を過ぎてすぐ、あたしは奏子に連絡を取った。「いつか時間取れない？」とだけ言ったあたしに、奏子はいいいよ、すぐ時間空ける、といて予定を空けてくれた。主婦で母親になった奏子に会うのは、彼女が結婚して5年以上経つ今も片手の指で足りるくらいだっというのに、奏子は何も言わずにあたしの呼び出しに応じてくれた。

「それに、こんなときに駆けつけられない友達のほうが、おかしいでしょ。そんなの友達じゃないって。」

そうって笑う奏子の顔は昔とあまり変わっていないように思うのに、すごく柔らかい。あたしは体勢を整えた。コーヒーを注文するべきか少し迷ってメニューを手にとってから、メニューを押し戻す。奏子を正面から見つめて、あたしは口を開いた。

「…やっぱり遊ばれたのかな、あたし。」

「私が話聞いている限りでは完全に遊ばれたようにしか思えないんだけど。あんたはそう思わないの？」

「や、うん。…遊ばれた、っていうんだと思うけど、普通は。ほら、あたし出会い系とかで会えるの、初めてだったし…。」

思ったとおりの返答にあたしは相槌を打って、朱文に会った日のことを思い出す。

結局あの日、カラオケルームであたしは朱文と朝まで過ごした。記憶はあまりない、というよりも記憶なんて必要ない気がした。あたしは朱文を拒まずに、朱文の手を離さなかった。朱文もあたしの手を離さずに、あたし達は一晩中一緒にいた。あの熱は、今でも思い出すとすぐに体の芯から蘇ってくる。あたしは小さく首を振った。

「…でも、思うんだけど、最初から体目的なら、一回会えば、もうあたしに連絡してくる必要ないよなーって、思っで。」

「え、まだ連絡くんの？朱文くんから。」

「あ、うん、来る。ふつうに…。」

あたしは頷いて携帯を取り出す。

あの夜を過ごしてから、あたしは後悔した。熱が上って冷えた後の、あの空気に耐えられなくなりそうだった。会話も出来なくて、始発が動き出す朝の5時ごろまで、がんがん映像の流れるカラオケのCMを見て過ごした。朱文も何も言わずに、ただ手を繋いだままだった。気まずさが渦巻くなかで帰る、って言い出せなかったのも、なんで朱文がそうしたのかも、その理由を聞けなかったのも、強く握り締め

られたあの手があったからかもしれない。

「で、どんなメール来るの？」

奏子がテーブルから体を乗り出してくる。あたしは取り出した携帯を広げた。あの日から一日だけあけて、朱文からは普通にメールが来るようになった。あたしはそれに戸惑って、でも普通に返信した。「こないだはありがとう、って来てからは、また話聞かせてね、とか、今日は学校の実習だとか、いろいろ…。」

受信ボックスを開いてスクロールしていくと、朱文のメールが続いている。でもどの内容も今までと大して変わらなかった。あの日のことはなかったかのようなメールに、あたしはだいぶ戸惑った。これが、奏子の言うようにエッチしようとかだったら、朱文に返事していなかったかもしれない。

「それだけ？あんたは朱文くんにも何も聞いてないの？」

奏子が眉間に皺を寄せて言う。あたしは頷いた。あの日から、あたしは朱文にも何も聞いていない。朱文も何も聞いてこない。あたしは送られてくるメールに返事をして、朱文からはそれに対してのメールがまた返ってくる。そんな繰り返しだった。あたしは相変わらずパソコンの横に携帯を置いたまま仕事をして、携帯が振動するたびに返事を返す。なにひとつ、変わっていなかった。

「うん。なんか、朱文が何も言わないし普通だから、もういいのかと思って。」

これは本当だった。遊ばれてるかもしれないって思いながらも、それでも少し疑問が残るところはあったけど、あたしは朱文に対して、何も言わなかった。携帯が鳴る感覚が前よりすこしだけ伸びたことも、朱文のメールが少しだけ短くなったことも、なんとなく画面を眺めながらそのままにした。会う前にあれだけ頻繁にしていた電話は、あれからかかってこないし、あたしからもかけなくなっていた。

「もういいって何が。あんたは遊ばれてるかもしれないって思ってんのに、なんでそれを聞かないわけ？」

不意に、奏子が苛立ちを隠さない口調で言う。確かにそうだ。あたしは黙ったまま首を振ってみせる。メニューを手にとって、あたしは奏子との前に立てた。奏子の目が見えない。あたしは呟く。

「そりゃ聞きたいんだけど…。けど…。」

メニューを立ててるから奏子の顔は見えず、あたしは下を向いて話した。そのまま煙草に火をつける。学生ときは奏子も吸っていた煙草だったけど、あたしの知らないうちに彼女は煙草をやめていて、ああ、色々変わっていくもんなんだな、って思った。今日会った彼女の目元が変わっていたのも、ああ、変わっていくんだなって。

「…結婚して、奏子もやっぱ、学生るときとは変わったじゃない？」

なんの話？って奏子の言葉が聞こえたけど、あたしは煙草の煙を吸い込んだ。指先が震えるのはいつものことで、なんてことない。水滴の浮いたガラスコップを見つめたまま、あたしは続ける。

「奏子だけじゃなくて、あたしも会社辞めてフリーで仕事始めだし、年取るから勿論みんな変わるんだけど、やっぱ、変わってくのが寂しいって思うとき、あって…。」

奏子は何も言わない。メニューを隔てた向こう側で奏子がどんな顔をしているか気になったけど、メニューを下ろす勇気はなかった。ただ奏子の息遣いが聞こえて、このメニューをどけても向こうにまだ奏子がいるんだってことに、少しだけ安心した。

「あたしも裕輔と別れて、フリーになって、って色々あって、自分では気づいてないけど、あたしも奏子から見て変わったところがあると思うんだよね、…でもそれって、いいことなんだけど、寂しいって思うときがあって、それで、朱文のこともなんか、向こうがこのままで行くつもりならそのままのほうがいいかなーとか。だって、変に聞いて、もし朱文からメールとか来なくなったら、今のあたしには、結構、キツイかな、って思って、でも遊ばれてるだけならやめたほうがいいのかもとか思うし…いま、

ぐちゃぐちゃなの、色々。変わりたくないけど、都合よくってのもなんかいやなんだけど、も一、わかんない、自分が。」

言いながら、あたしは言葉を詰まらせた。

あたしは、雨の日に、ひとりで泣きそうになって蹲ってる自分が大嫌いだ。朱文にあの日のことを聞いて、パソコンの横に携帯を置いて朱文の返事を待ち続けることになってもしその返事が来なかったら、またあの日と同じように逆戻りしそうな自分が嫌だった。雨の日を怖がっていたみたいに、あたしはまた何かを怖がることになりそうで。

あの朝、帰ってからあたしは携帯を握り締めたまま眠っていて、起きて、なんとなく自分に起こったことを考えて、がんがんする頭とだるい体を引きずって、それから死んだように眠った。長い夜を通り過ぎて、明るい昼をやり過ごして、ただひたすら眠った。

起きたとき、あたしの頭の中ではあの時のことは正直曖昧に霞んでいて、繋がれた体温と、朱文の体温が、明け方そっと離れて、「帰ろっか。大丈夫？」と言った瞬間だけが鮮明に残っていた。

「…そりゃあ、学生の頃とは私もあんたも違うから、どんな風にあんたが考えたってあたしは別にいいと思う。それが変わったってことなんだろうし。」

両手で掴んでいたメニューを取り上げられて、あたしは小さく声を上げる。メニューが目の上まで上がってきて奏子の顔を見るのが怖い、と思ったけど、見えた奏子の顔は優しかった。子供を抱いて笑っている姿が似合いそうな笑顔だと思った。

「でも、ちゃんと考えないと。負わなくていい傷まで負うことないんだから。あ、もうこんな時間。」

奏子はそう言って、ごめん、翔を迎えに行かなきゃ。ってテーブルの上の伝票を手を取った。あたしも慌てて立ち上がる。あたしもポケットの中でヴー、ヴー、って鳴り始めた携帯をどうにかしたかった。奏子の言葉を頭の中で繰り返す。負わなくていい傷。頷く代わりに口を開いた。自分でも分かってる。あたしは自分から傷つきに行こうとしてる。でも、それでいいんだって思ってる自分がある。だけだ。

「…だいじょうぶ。あたしも、それくらいは。」

「なら、いいけど。」

携帯をポケットの上から押さえつける。ちらりと見えた液晶には、メールマークが表示されている。壁にかかった時計を見る。長い秒針は8のあたりを過ぎて、もうひとつの秒針が4の辺りで揺れていた。

「…今日は、ありがとう、奏子。今日はあたしが奢るよ。」

奏子の手から伝票を抜き取って、あたしはレジに向かう。奏子の靴音を背後に聞きながら、あたしは会計を済ませた。無表情の従業員からおつりを受け取る。奏子に振り返って、あたしは言う。

「今度はさ、翔くんにも会わせて。全然会えてなくて、ごめんね。」

あたしが言うと、奏子は笑った。優しい、と思う。彼女は学生のときからこんな風に優しかった。あたしと彼女の関係は学生の頃と何一つ変わっていない。飲むコーヒーも食べるケーキの味も、あたしが奏子を呼び出す理由も奏子が少しきつい口調であたしに言うのも、変わっていない。

「ぜんぜん。忙しいんだし。じゃあ今度は私から呼び出すから、そのときは時間絶対、あけて。」

「うん。ありがと。」

手を振って、店の前であたしと奏子は別れる。空気が熱を含んでいる中を颯爽と歩いていく奏子の後姿を見つめ続けて、彼女の後姿が小さくなったところで、方向を変えた。奏子は今からきっとスーパーにでも買い物に行って、晩ごはんのおかずでも買って帰って、翔くんを迎えにいった、翔くんと遊んだ

りしながらごはんを作って旦那さんを待つんだろうな。きっとそんな風に過ごすんだらうって想像した。

あたしと会って話すときの奏子は学生のままでも、あたしの知らないところであたしの知らない奏子はあの頃よりたくさん増えているんだらうって思う。たとえば化粧とか、生活とか、いろんなことが。

また、ポケットの中でヴー、って鳴った携帯を取り出す。今度はメールマークじゃなくて名前が表示されていた。あたしは通話ボタンを押す。

「…あ、えと、初めまして。メール、ごめんなさい。5時で大丈夫です。服は、えっと、グレーの薄手のニットに黒のショートパンツです。蒼井さんはどんな格好してるんですか。」

彼の特徴を聞いて、あたしは歩き出した。20分もあれば駅に着く。奏子が歩いていった方向に背を向けて、あたしは歩き出した。

「え、ちゃんと会いに行きますよ。サクラとかじゃないです。蒼井さんこそちゃんと来てくれるんですか。」

会話しながら、一步一步、蒼井という男が待つ駅に向かう。あたしはこれから、顔も素性も知らない男と会う。知り合って3日くらいの男に会いに行く。『なかよくしてね』そんな単調なメールにあたしも『よかったら』なんて簡単な返信をして、すぐに会う約束をした。朱文のときみたいにメールをたくさんしたわけでも、電話をたくさんしたわけでもない。でも、あたしは彼と会う約束をした。

「え、あたし、約束投げ出せるような度胸ある女じゃないんで。え、蒼井さんと会うって決めた理由ですか？」

電話越しの声は軽くて、朱文とは違っていた。朱文の穏やかに優しい声とは違って、少し低めではあったけど明るい声だった。電話越しに車の走り抜ける音が聞こえてくる。彼は、こんな短期間で会ってくれるとは思わなかった、と言って笑った。あたしも、口の端だけ上げる。

「蒼井さん、いい人そうだなと思ったんで。電話で話してるのもほら、優しそうだし。」

負わなくてもいい傷ってゆうやつを負っちゃったとして、その痛みを緩和するには、優しそうな人が一番いいような、気がする。

後半の言葉を飲み込んであたしは駅のほうを見据える。待ち合わせに指定した駅だ。大きい看板に書かれた駅名が見える。あの駅の下で蒼井と名乗る男が待ってるのかと思うと不思議な気分になった。携帯のメール画面でしか知らなかった男が急にリアルになる。朱文と会うときとはまた、違って。

「…もう、着くんで、また着いたら、電話しますね。一度、切ります。」

深呼吸をしたい。煙草を吸いたい。あたしは電話を切った。駅の近くに灰皿があったはずで、あたしはそこに足早に急ぐ。朱文と初めて会ったときと同じように。灰皿を見つけて、そこに行くまでにライターに火をつけた。煙を肺に吸い込んで、息をつく。携帯がまた鳴り出したけど、見ないふりをした。

一本吸い終わったら電話するので、ちょっとだけ待ってください。一本ゆっくり吸ったら。ちゃんと。

「…あきふみ。」

だけど、あまりにやまない携帯を無視し続けることができなくなって、あたしは携帯を取り出した。きっと蒼井だらう、って軽い気持ちで引き抜いた携帯の表示には予想しない名前があって、あたしは驚いて何度か見直した。

「…なんで。」

間違いかと思って何度か見直す。でも、何回見直しても表示画面には朱文、と表示されていて、その

下には番号が映っていて。あたしはしばらく画面を眺めていた。あの日から一度もかかってこなかった電話が、あたしからもかけられなかった電話が、どうしてこのタイミングでかかってくるんだろう。黒い画面に、朱文、って文字と電話番号が光っている。

右手に持った煙草からぼろぼろと白い灰が小刻みに落ちていく。自分が震えてるんだ、とその時気がついて、あたしは煙草を地面に落として踏みつけた。震えるな、あたし。言い聞かせて、通話ボタンを押す。